様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　４ 月 ２１ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2021～2022
課題番号：２１Ｋ２００３６

研究課題名（和文）中世イスラームにおけるスンナ派とシーア派の対話：十二イマームの美質の書の研究

研究課題名（英文）Dialogue between Sunnis and Shi'is in Medieval Islam: Fada'il works on the Twelve Imams

研究代表者
水上　遼（Mizukami, Ryo）

東京大学・東洋文化研究所・特任研究員

研究者番号：３０９０８０８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、一般的にシーア派の宗教指導者とされる十二イマームが、前近代にスンナ派の間でも広く崇敬されていた現象に着目し、十二イマームがスンナ派の文脈の中でいかに崇敬対象となったかを、十二イマームの美質の書という文献群から分析した。その結果、大きく３つの研究成果が得られた。第一は、イマームに関する伝承が宗派を超えて受け継がれていたことを13-17世紀という長期的な枠組みで明らかにした論文であり、第二はスンナ派の十二イマーム崇敬の中でマフディー（救世主）がいかに理解されていたかを検討した論文、第三は14世紀イランの宗派間関係について詳細な記述のある年代記『オルジェイトゥ史』の訳註である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
スンナ派とシーア派に関してはこれまで対立や思想上の相違に関心が集中していたが、十二イマームという両派共通の崇敬対象をめぐる議論や宗派間交流の詳細を明らかにしたことにより、両派の相互理解や自派・他派認識の歴史的展開を新たな視点から検討することが可能となった。それにより、イスラームの宗派についての本質主義的理解を克服する手がかりを得て、その内部の思想的多様性や思想形成の長期性、そして宗派境界の柔軟性に関する理解を深めることができた。

研究成果の概要（英文）：This research project made clear how the Twelve Imams, the twelve symbolic figures of Shi'ism, were venerated by Sunnis in their Sunni contexts, by analyzing fada'il works on the Twelve Imams written by Imamophilic Sunnis in the pre-modern periods. This project obtained three important achievements. First, the article in English on interconfessional transmission of the traditions about the Twelve Imams in 13th-17th centuries. Second, the article in Japanese on various understandings of the Mahdi(savior) among Imamophilic Sunnis. Third, the Japanese translation and notes of a Persian chronicle in the 14th century, Tarikh-i Uljaytu, which has detailed accounts about the Sunni-Shi'i relationship at that time.

研究分野：前近代イスラーム史

キーワード：イスラーム　スンナ派・シーア派関係　十二イマーム　美質の書　イルハン朝

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

イスラームの二大宗派であるスンナ派とシーア派の根本的な相違点として、預言者ムハンマドの死後の正当な後継者としてスンナ派は正統カリフを、シーア派（特に十二イマーム派。以降単にシーア派と表記する）は十二イマームを支持した、と一般的に理解されている。一方これまでの研究では、前近代のスンナ派の支配者や知識人たちの間で十二イマームへの支持を公然と表明する人々がいたことが繰り返し指摘されてきた。先行研究ではこうしたスンナ派内の十二イマーム崇敬について、同じくシーア派の特徴と考えられがちなアリー一族崇敬やムハンマド一族崇敬としばしば結び付けられながら、‘Alid loyalism、Philo-‘Alidism、Tashayyu‘ Hasan、Ahl al-Baytism、Twelver Sunnis、Confessional Ambiguity や Imamophilia など、実に様々な名称で言い表されてきた。

しかし、これらの研究の多くには十二イマーム崇敬やアリー一族・ムハンマド一族崇敬の捉え方に関していくつか問題点が存在した。まず、多くの研究では、これらの現象が起こる時期を 13 世紀半ばのモンゴル帝国によるアッバース朝政権の打倒から、16 世紀初頭のサファヴィー朝の成立までという、王朝の興亡をその画期としていた。しかし、すでに 1960、70 年代の研究から、モンゴル侵入以前の 12 世紀からそうした事例が確認されることが指摘されており、同様に近年の研究では 16 世紀初頭以降にも事例が存在することが明らかにされている。そのため、単純に王朝の期間で区切るのではなく、時間軸を前後に延長させて理解する必要がある。第二の問題は、ムハンマド一族崇敬を十二イマーム崇敬と区別せず、両者をともに 13 世紀または 12 世紀からの現象として位置付けてしまっている点である。十二イマーム崇敬と異なり、アリー一族やムハンマド一族については 12 世紀以前のムスリム諸社会でも特別な社会的地位を持つ人々とみなされてきたことが明らかになっている。一方、十二イマームという枠組みの構築やそこに入る人物の確定には明らかにシーア派の先行性が確認できる。そのため、両崇敬についてはその違いを区別しつつ検討されるべきである。最後に、十二イマームを支持するスンナ派の宗派意識に関する問題が挙げられる。上述の、一般的なスンナ派理解とは異なるスンナ派は、しばしば「親シーア派的」で「宗派意識の曖昧な」人々とされ、周縁化されてきた。しかし、やはり近年の研究により、十二イマームやアリー一族・ムハンマド一族を支持するスンナ派が政治的な場面では自らのスンナ派性を強調している事例や、さらにはスンナ派への帰属やシーア派への反感を表明しつつ十二イマームを支持するスンナ派の事例さえも指摘されている。このことは、少なくとも前近代のスンナ派にとって、十二イマーム崇敬が親シーア派傾向や宗派意識の希薄化と必ずしも同義でなかったことを意味している。

これらの問題点を克服するためには、十二イマームがどのように語られ、宗派といかに結び付けられているのかについて、スンナ派知識人自身が残したテクストの中から再検討すべきと考え、本研究を開始した。

２．研究の目的

スンナ派の十二イマーム崇敬を分析することは、スンナ派という宗派の形成や、宗派内の思想の多様性、そしてシーア派との宗派境界のあり方を理解する上で重要となる。十二イマームへの賛美を記す年代記や人名録、思想書は、スンナ派が著したものの中にも多く見られ、そうした著者たちもまたその他のスンナ派学者から十二イマームへの賛美を理由に非難されることはほとんど無かった。そのため、シーア派と共通の人物を支持したという点だけをもって親シーア派的傾向あるいは宗派意識の希薄化と判断するのではなく、スンナ派の多様な知的伝統の一つとして十二イマームを自派の枠内に位置づけようとした試みとして捉え直すべきである。

上記の目的を達成するために有効な史料となるのが、スンナ派学者たちが繰り返し編纂した十二イマームの美質の書という文献である。十二イマームの美質の書は、十二イマームが持つ優れた性質や行状に関する伝承がまとめられたものであり、スンナ派によって著される同文献はスンナ派の十二イマーム崇敬が最もよく反映された史料と言える。しかし、奇蹟譚など史実性の疑わしい伝承が多く含まれることもあってか、歴史研究においてこれらの美質の書作品が主な分析対象となることは稀であった。こうした背景を踏まえ、本研究ではスンナ派の十二イマームの美質の書作品に記される伝承の情報源や十二イマーム観に焦点を当て、彼らがどのようにして十二イマームを理解し、また宗派と結び付けて提示しようとしていたかを明らかにすることを目指す。

３．研究の方法

２で述べたとおり、本研究で主史料とするのは、イスラーム諸地域のスンナ派学者たちが編纂した十二イマームの美質の書である。美質の書は主に過去の伝承がまとめられた文献であるため、個々の伝承自体が書かれた時代の社会を直接物語るものではない。そこで本研究では、①美質の書に記される情報源の分析、②多くの著者が解説を加える重要な伝承や信仰の分析、という

２つの観点から考察を行う。
情報源の分析に関しては、伝承を引用する際に記される、著者が依拠した文献を網羅的に検討することにより、著者の十二イマーム理解の土台や、多くの著者に利用される文献が何なのかを明らかにすることができる。このことは、著者たちの思想的な影響関係や、シーア派文献との距離の置き方を解明することに繋がる。特に本研究では、以降の美質の書で多く引用されることになる 13 世紀のスンナ派学者イブン・タルハ（1254 年没）の『探究者の求めるもの』(*Matalib al-Sa'ul*)に着目し、同書がなぜ後代に注目されるようになったのかを明らかにする。
多くの美質の書の著者たちが解説を付す話題の一つに、第 12 代イマームであるムハンマド・ブン・ハサンをマフディー（Mahdi．救世主）とみなすか否か、という問題がある。シーア派にとって、彼をマフディーとみなす主張は同派の根幹教義の一つであり、そのことは預言者ムハンマドや歴代イマームに予言されていたことだとされる。スンナ派の著者たちがそうしたシーア派の主張をそのまま受容するのか、独自の解釈を提示するか、あるいは否定するのかを分析することで、著者の宗派的な立場や宗派境界の理解を明らかにすることができる。

４．研究成果

本研究では、３で述べた分析方法①および②についてそれぞれ研究成果を得ただけでなく、14 世紀のスンナ派・シーア派関係を考察する上で重要な史料の訳註を刊行することもできた。よって、２年間を通じて行われた本研究は実りの多いものとなったと言える。
まず①に関して、イブン・タルハの『探究者の求めるもの』に記される諸伝承が、シーア派学者イルビリー(1293 または 94 年没)の十二イマームの美質の書『悲嘆の除去』(*Kashf al-Ghumma*)を介して後代のスンナ派学者の作品に引用される過程を論じた英語論文、Ryo Mizukami, “Interconfessional Dialogue on Fada'il of the Twelve Imams: Rethinking the Confessional Boundary between Sunnism and Shi'ism in Medieval and Early Modern Islam,” *Orient: Journal of the Society for Near Eastern Studies in Japan*, 58 (2023), pp. 171-186 が刊行された。同論文では、スンナ派文献とシーア派文献の双方を利用し、十二イマーム崇敬の超宗派性を示そうとしたイルビリーが、『悲嘆の除去』においてイブン・タルハを主要典拠の一つと位置付けたことや、種々の文献から穏健な内容の伝承を網羅的に収集した『悲嘆の除去』が後代のスンナ派学者たちに好んで利用された結果、『悲嘆の除去』を介してイブン・タルハの伝承が孫引きされていったことを 13 世紀から 17 世紀の長い時間軸から明らかにした。このことは同時に、『悲嘆の除去』の利用に顕著なように、スンナ派の十二イマーム崇敬において、両派の伝承が次第に混ざり合っていったことを意味すると言える。換言すれば、スンナ派の十二イマーム崇敬は、シーア派の文献や伝承との影響関係の中で展開していったのである。
②の成果としては、水上遼「スンナ派の十二イマーム崇敬とマフディー」『東洋文化』103(2023), pp. 157-180 が得られた。同論文では、第 12 代イマームをマフディーと同一視する主張に関して、13-14 世紀のスンナ派の美質の書著者らの立場を「脱シーア派的肯定論」、「スンナ派・シーア派混交的肯定論」、「否定論」の３つに分類し、それぞれの特徴を明らかにした。脱シーア派的肯定論の場合、第 12 代イマームをマフディーとみなすものの、その根拠付けや解説の際にシーア派と異なる方法をとる。そのため、シーア派と距離を置きつつ肯定論を展開しているという点で、著者の宗派意識の表明を読み取ることができる。一方、混交的肯定論では、著者はシーア派の伝承を根拠とすることを認めているため、預言者ムハンマドなどによるマフディーの予言の伝承が引用され、逆に詳細な解説はなされない。ゆえに、この立場をとる著者については、少なくともマフディーに関する問題では宗派性が見られないと言える。否定論では、第 12 代イマームの権威自体を認めない、あるいはイマーム性は認めてもマフディー性は否定するという特徴がある。特にザランディー（1349 年以降没）は、マフディー性を認める立場をシーア派のものとしており、否定論と肯定論のどちらをとるかに宗派の境界があるとみなしていた。これらの検討により、十二イマームを支持するスンナ派の思想が決して一様でなかったこと、そして十二イマーム崇敬をスンナ派的な文脈に位置づけようという試みが多く行われていたことが明らかになった。
研究成果の最後として、史料の翻訳である、カーシャーニー（著）、大塚修、赤坂恒明、高木小苗、水上遼、渡部良子（共訳）『オルジェイトゥ史：イランのモンゴル政権イル・ハン国の宮廷年代記』名古屋大学出版会、2022 について述べる。同書は 14 世紀初頭イランのイル・ハン国の宮廷年代記であるが、そこでは君主オルジェイトゥのもとでのスンナ派、シーア派双方の学者による宗派に関する議論や、最終的にオルジェイトゥがスンナ派からシーア派への改宗を決断する場面についての詳細な記述がある。そのため、同書訳註の刊行は、当時のスンナ派・シーア派関係に関する第一級の史料の内容やその意義を広く世に示す上で重要である。加えて、この訳註はペルシア語歴史書の全訳としては日本最初のものであり、日本におけるペルシア語史料研究の発展にも資するものとなるだろう。
上述の成果は新しい研究分野である十二イマームの美質の書研究において、これからの研究の見取り図となるものである。今後は、そうした見取り図にもとづき、時にはそれを修正しつつ、個々の美質の書作品を詳細に分析・検討していきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Ryo Mizukami	４．巻 58
２．論文標題 Interconfessional Dialogue on Fada'il of the Twelve Imams: Rethinking the Confessional Boundary between Sunnism and Shi'ism in Medieval and Early Modern Islam	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Orient: Journal of the Society for Near Eastern Studies in Japan	６．最初と最後の頁 171～186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　3件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 水上 遼
２．発表標題 『オルジェイトゥ史』に描かれる 14世紀のイランとユーラシア：宗教・政治・対外関係を中心に
３．学会等名 大元大明研究会・「グローバル化社会における多元文化学の構築」（早稲田大学総合人文科学センター研究部門）（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 水上 遼
２．発表標題 都市を飛び交う集団イジャーザ：13-14世紀バグダードを中心に
３．学会等名 共同利用・共同研究課題「中東・イスラームの歴史と歴史空間の可視化分析―デジタル化時代の学知の共有をめざして」2021年度第1回研究会（通算第3回目）「イジャーザがつなぐ都市・人・学知」（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 水上 遼
２．発表標題 スンナ派の十二イマーム崇敬とマフディー
３．学会等名 東文研シンポジウム「ムハンマドの血筋とムスリム：預言者一族をめぐる多様な語りと語り手たち」（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計4件

1．著者名 水上遼（森本一夫 責任編集）	4．発行年 2023年
2．出版社 東京大学東洋文化研究所	5．総ページ数 252
3．書名 東洋文化103号（特集「『ムハンマドの血筋』とムスリム：アリー一族をめぐる多様な語りと語り手たち」。うち執筆分「スンナ派の十二イマーム崇敬とマフディー」157-180頁）	

1．著者名 'Arif Nawshahi（著）、Ryo Mizukami（訳）	4．発行年 2023年
2．出版社 Idara-yi Ma'arif-i Nawshahiya (Islamabad, Pakistan)	5．総ページ数 152
3．書名 Guftar-ha-yi Japan（日本での二講演）	

1．著者名 水上遼（イスラーム文化事典編集委員会 編）	4．発行年 2023年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 735
3．書名 イスラーム文化事典（うち執筆分「偉人伝（イラン）」308-309頁）	

1．著者名 カーシャーニー（著）、大塚修、赤坂恒明、高木小苗、水上遼、渡部良子（共訳）	4．発行年 2022年
2．出版社 名古屋大学出版会	5．総ページ数 509
3．書名 オルジェイトゥ史：イランのモンゴル政権イル・ハン国の宮廷年代記	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関